

謹 弔

次の会員がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

清 水 俊 朋 氏	下関市医師会	12 月 29 日	享 年 93
原 八洲雄 氏	下関市医師会	1 月 5 日	享 年 81
河 野 裕 氏	宇部市医師会	1 月 9 日	享 年 68
椎 木 保 人 氏	徳 山医師会	1 月 10 日	享 年 90
永 井 繁 敏 氏	下関市医師会	1 月 13 日	享 年 90
嶋 元 徹 氏	大島郡医師会	1 月 24 日	享 年 58

編 集 後 記

今年 1 月より、「妊婦加算」が凍結というか停止された。昨年の診療報酬改定で加算が設けられて 1 年足らず、与党からの見直しを求める圧力で、厚労省のスピーディーな方向転換だった。

この顛末の原因を考えると、本来の目的と異なる加算（なぜここでコンタクトレンズ処方を出すのかとの不満は置いておく）、患者への説明のないままの徴収、統一地方選や参院選を控えた政治家の思惑、そして何よりも「妊婦加算」本来の目的が国民に伝わってなかったことが挙げられるだろう。妊婦の診療に積極的な医療機関を増やすことを目的に導入された「妊婦加算」であるのに、SNS の書き込みを発端とした新聞、テレビの「妊婦税」「少子化対策に逆行」の批判を受け、停止に追い込まれたのだ。県医師会広報担当の末席の私には、報道の威力を実感した事件でもある。

そんなふうに残然としない 1 月のある日の朝日新聞に、福岡県の産婦人科医師の吉満陽考 先生の素晴らしい投稿を発見した。先生の「加算は妊娠配慮した診療のため」を読むと、現在、産婦人科以外の科が妊婦さんへの投薬をためらい、産婦人科へ紹介するために妊婦さんが二つの科を受診せざるを得ない例が少なくない。この妊婦加算により、一つの科が妊娠に配慮して診療すれば、妊婦さんの体も金銭面も負担が軽くなるので、この制度を停止せず正しく使いたいとの明解なメッセージが伝わってくる。吉満先生、妊婦さんの視点に立ったこの温かいメッセージを、ぜひ SNS に上げてください。誰かお隣の県に伝えてくれないだろうか。

新年早々、感心したりお願いしたり気忙しいが、今回の騒動をわが身に引き寄せて考えてみる。これまでは、県民の健康を守るための医療情報を周知すること、医師会の活動を正しく知ってもらうことが広報の仕事と捉えていた（まあ、もっとあるでしょうと叱られるかな?）。しかし、それだけでは不十分ではないか。

この過度に情報化された現代、ミスリードする報道に物申すことも必要ではなかろうか。それも世間の関心が薄れる前に、時機を見て。

自分の頭で考えることを必要としないという意味でのわかりやすい情報ばかりが拡散されるネット社会、うかうかしていると本来とはかけ離れた姿に誤解曲解されとも限らない。報道機関に圧力をかける力も（多分）なく、お年玉をばらまく経済力も（多分）ない医師会広報は、地道に情報発信し、たとえ小さな声でもマスコミに物申す姿勢を持ちたいと、亥年にささやかな決意をする。

（理事 長谷川 奈津江）